

おおさか

KEYワード
第61回

大阪人の魂を揺るがす物語

メンバーみんなを言えますか

昔から大阪人には、実力がありながら敗れ去る者への名状しがたい愛着がある。太平記の楠木正成、将棋の阪田三吉がそうだし、阪神タイガースびいきもその流れかもしれない。戦後成長期を生き私の父など、彼らの生き様を自分に投影し、大阪で生きるうへの励ましにしていたに違いない。

真田幸村への大阪人の愛情は、さらに強い。物語で語られる幸村は痛快であり、悲愴であり、潔い。大阪人は幸村を敬愛するが故に、昭和62年、真田山の三光神社に采配をふるう立像が、平成21年、戦死した安居神社に坐像が建立された。上本町ハイハイタウンには「大坂の陣400年 天王寺区真田幸村博」と関連して「真田幸村緒戦勝利の碑」も建立されている。



三光神社「真田幸村公之像」



安居神社「真田幸村公之像」

幸村には謎が多く、本名も信繁だったらしい。英雄としての登場は、寛文12(1672)年の「難波戦記」とされ、元禄の「真田三代記」を経て「真田十勇士」の原型が登場し、幕末明治に大衆のヒーローとなった。明治44(1911)年から大正13(1924)年までに、講談をもとに大阪から約200篇を刊行した立川文庫にも、『知謀 真田幸村』『猿飛佐助』『霧隠才蔵』などがある。

真田十勇士のメンバーは、一般には猿飛佐助、霧隠才蔵、三好清海入道、三好伊三入道、穴山小助、由利鎌之助、笈十蔵、海野六郎、根津甚八、望月六郎が知られる。織田作之助も『猿飛佐助』(1945年)を書いた。織田は阪田三吉が主人公の小説も書き、自身も志の半ばで斃れた。十勇士みたいに大阪人に愛される資格十分である。

私などは、東映動画の「少年猿飛佐助」(1959年)が好きで、テレビの再放送で主題歌を覚えた。辻村寿三郎(旧名:辻村ジュサブロー)が人形、柴田錬三郎原作のNHK人形劇「真田十勇士」(1975~1977年)も懐かしい。

幸村を思うと浮かぶ情景がある。小学校低学年の夜、母が入院した病院の待合室かどこかで、大坂の陣のテレビドラマを見た記憶である。母に



上本町ハイハイタウンにある「真田十勇士の顔出しパネル」

確認すると病院は、昭和39(1964)年に出産で入院した白髪橋の北、西区新町時代の日生病院らしい。東京オリンピック開幕直前で、テレビも普及しはじめていた。入院同月に朝日放送の時代劇「風雲真田城」が放送開始で、その記憶なのだろう。

しかし、弟が生まれても、母が入院した不安や寂しさはテレビを見た記憶につながっている。幸村や十勇士に私がいつも感じるもの悲しさは、悲劇的な結末以上に、少年期にすり込まれた印象のせいかも知れない。

それにだいたい、少数精鋭にしても、十人ではすぐ全滅しそうで心許ない。フィクションに徹底するならばこんな新ストーリーはどうだろう。水辺の要害・梁山泊に百八人の英雄豪傑が立て籠もって官軍と戦う痛快な中国の小説「水滸伝」にならい、ひとつ派手に十勇士を九十八人増員し「真田百八勇士」にするのである。「水滸伝」は江戸時代に輸入され、馬琴の「南総里見八犬伝」にも影響する。棍棒を振り回す三好清海入道なんて「水滸伝」の花和尚・魯智深のイメージに近い。

いっそ、朝起きて真田丸を見上げたら、「六文銭」に混じって梁山泊のモットー「替天行道」の旗がたなびいている。山田風太郎の忍法帖と北方謙三の漢の世界が入り乱れたような歴史ロマンが展開し、幸村を頭領に、徳川にも豊臣にも与せず、第三の勢力として日々発止のかけひきがはじまる…パンパン!(張り扇で釈台をたたく音)

といった案を、上町台地を舞台に小説を執筆している作家の堂垣園江さんに勧めたら、「面白いけど、書いても書かなくても一つのことに十の文句を言うでしょ?」とあしらわれた。つまり、私は文句を「十勇士(十言うし)」、すでに夢想の真田丸に入城してたんですな。家康公、お覚悟を!

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念 佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像—」(創元社)など。